

氏 名	ソウ 徐	ギョウ 貴	スク 淑
学位(専攻分野)	博 士	(学 術)	
学 位 記 番 号	博 乙 第 47 号		
学位授与の日付	平成 8 年 11 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
学位論文題目	言語による建築的空間の表現に関する基礎的考察		
審 査 委 員	(主査) 教 授 河 邊 聡		
	教 授 太 田 喬 夫	教 授 日 向 進	京 都 大 学 教 授 加 藤 邦 男

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、文学作品の中に描かれた多くの空間の中の建築的に意味ある空間に着目し、言語によって建築の空間がどのように表現されるものかを考察したものである。

文学の中に現われる空間とは、書き手の意思によって成立するものであり、描かれた空間はある文化の状況の中で、書き手がその時代と社会を表現しているものと言える。それは書き手の感情のフィルターを通して認識される心象空間として読み取ることが出来る。それは書き手が自分の空間感覚を組み立てて読者に提供するメッセージである。ここではそのメッセージを建築的に意味あるものとして注目し、建築空間との関係のもとで考察している。

文学の中で見られるのはことば(言語)であり、そのことばの集りとして一つ一つの文章(文脈)がある。そしてこの文章のまとまりであるテキストとしての作品がある。そこではそれぞれのものが意味を提示し空間を指し示している。ここでは建築の意味を探るのに、ことばという記号の中に入り込むことを意図し、ことばと空間は相互に結ばれているという考えを基礎としている。ことばを空間という対象を示すものと考え、ことばで表現されるべき意味の表象として建築空間を考えることも出来る。つまりテキストとしての建築を、具体的なものから抽象的なものまで表出するということになる。文学作品をリファランスすること、もっと広い意味でいうならば、ことばで建築を考えることが一つの建築表現であるという考えに、本論文は基づいている。

文学の中の空間を把握することは、ことばで語られているその空間が何を表現しているものであるか、ことばによって表わされる空間のイメージは何かを理解することであり、文学の深層空間がもつ意味を読み取り、その建築的解釈を試みることである。選択された具体的な空間の空間構造がもつ意味は何であるのか、いいかえれば空間そのものの意味を明らかにすることで、人の空間に対する解釈や空間創造、あるいは更に広げて空間人と人とのかわりを理解することを、多様に可能にするものである。

本研究の資料として用いた文学作品は夏目漱石のものである。漱石は「芸術は自己の表現に始って、自己の表現に終わるものである」と言っている。自己の表現とは意識の層を描き出すことであり、この点が彼の作品形式の独特な点であるとされる。潜在的な意識の表現は、その人の個性の表現ともなり、また現実社会との間に生ずる様々な関係の表現でもある。本研究では、漱石の文学のなかに表わされる空間を、こうした自己の意識が投影されたものとして認識し、空間に対する意識をどのような形式で表現し、その意識する空間がいかなる性格をもつものであるかを探っている。このことは建築空間を新たに知る手がかりとして重要であると考えている。

本研究は、上述した研究の意義と目的にそって、次のような内容で構成されている。

序章：本研究の目的と関連既往研究について述べている。

1 章：ことばと建築空間

ことばで表現された文学に現わされる空間のなかから、ことばと空間が直接関連しているものを抽出し論じている。すなわち場（場所）を指示する三つのことば〈ここ・そこ・あそこ〉を例えばとりあげ、三つのことばがもつ相互的な空間構造とそれらが示す場（場所）の意味を検討した上で、建築空間とのかかわりを述べている。さらに〈向う一手前〉〈右一左〉〈上一下〉の三つの対話を抽出し、それらのことばによって、全空間が構築できることを提案し、文章の示す空間を図化して示している。

2 章：テキストにみる建築の空間的諸関係

文学の中の空間を建築空間として捉え、テキストを通じて建築における空間の意味を考察している。そこはさらに二部に分けて構成されている。

一部は、個別空間と境界空間をめぐってのものである。個別空間は相互の対立と分割の関係によって示されるものである。さらに個別空間を通して境界の存在が意識されている。テキストの中から個別空間のそれぞれがもつ基本的な意味を探しだし、それを通じて空間の相互関係、ひいては境界空間の意味と様態を探っている。

二部では、建築空間形成においての全体と部分との展開関係を分析し、複数の空間と複数の境界から構成される空間の組み立てについて考察している。テキストを通じて建築の空間構成がもつ意味を認識し、空間構成に幾つかの空間図式が導き出されることを表明している。

3 章：建築的空間と空間意識

文学の中の空間が、作者によってどのような意識をもって創造された空間であるかを考察している。テキストは漱石の『草枕』を対象にし、そこに浮び上がる空間は二つであることを示している。一つは、理想的な空間の創造を意図したものである。それは漱石にとって自己の存在の根源につながるものであり、自己を思索しあるいは求める意味としての空間であるとしている。すなわちそれはことばによってのみ示される建築的空間である。他の一つは、漱石の造形的な空間構想を建築家の描く透視図の空間と重ねること、建築家が描く図面との関連性を見ることが出来ることを提案している。

結び：各章で述べた内容及びその考察から得られた成果をとりまとめて、結論として得られた知見を述べている。

論文審査の結果の要旨

本研究は、建築の分野にとって文学作品を読み込むことが、建築空間の理解をより一層深めることとなり重要であることを示唆している。ことばによる建築表現は、西欧近世の建築書の出版などの例を引くまでもなく、様々に存在する。本論文はその分野に属する。建築に関係することばは様々にあり、日常我々はそれらを駆使して意思の伝達を計っている。その日常的なことばと建築空間とを、ある意図をもって計画的に対置するとき、日常的なことばは特別な意味を示し始める。例えば〈ここ・そこ・あそこ〉というごく日常的に使われることばは、建築空間と対置させるとき具体的な特別の空間を示すことになる。論文ではこのことを主に夏目漱石の「草枕」を素材に克明に検証している。論文の全体は三つの章からなっている。ことばと建築空間とを対置した時、人が理解できることが3段階に分れることを、それによって示している。一つは直接的な関係のものであり、二つには複数の空間相互の関係を規定することによる個別の建築空間の定立を計ることが出来るものである。他の一つは現実の空間を通しての非現実的な空間の認識である。それは意識の世界であり理想の世界でもある。これはさらに建築創造の意識に関連づけて、透視図制作の意識に繋がられている。

言語による建築空間の研究が、従来の建築研究をさらに拡大させるものであることを本論文は示していると考えられる。

本論文にかかわる公表学術論文は4編である。1編は日本建築学会計画系論文集平成8年7月号(485

号、pp. 227-235）に掲載され、他の 1 編が同年11月号に掲載が決定している。他に 1 編が同論文集で審査中である。以上の論文はいずれも申請者の単著または筆頭著者のものである。また 1 編は京都工芸繊維大学工芸学部研究報告「人文」第41号に掲載されている。